

【アートな匙加減】 一人一人が復興の底力に

(2011 年 6 月 19 日産経新聞掲載)

連日、気分の落ち込むような原発関連報道を前に心晴れない今日このごろだ。とにかく身体を動かし、時間を忘れようと、今日も絵の画面に向かっている。

絵の具を絵皿にとき、構想をエスキース(下絵)に荒描きしてみる。中下絵から原寸大の大作絵に進むうちにコンセプトもかたまり、心が高揚してくる。いよいよ大画面(200号大)に向かう。

3月11日、東日本大震災が発生したとき、私は個展のための大作群を描いていたところだった。地震は、私の子供のころの記憶の中にある福井地震(昭和23年)を思い出させるほどの揺れで、思わずアトリエを飛び出した。一瞬、関東が震源地かと思うほどだったが、テレビ画面からは想像を絶するような、東北地方の津波の映像が流れていて、驚愕(きょうがく)した。

思えば阪神大震災の折も大作を描いていた。絵はほぼ完成に向かっていたのだが、震災の発生を知って、急遽(きゅうきょ)図像を変更することにした。完成間際での変更は、私にとってつらい決断だったが、震災の記憶を画面にとどめようと必死だったのだ。私は、復興のがれきの中にたたずむ家族に、木偶の赤子を持たせてみた。

3月11日以来、私は胸中にわき起こる思いを具体化し、キャンバスに定着させる作業を飽きもせず繰り返している。描き上げたものは、気がつけば仏画ばかりだった。絵は驚くほど冗舌に描き手の胸中を明らかにする。ときには私自身が驚くようなものが描き出されることもあるのだ。私のアトリエは鎮魂を描いた作品で埋め尽くされようとしている。

震災以後、われわれは多くの茶番劇を見せられた。論理的な検証はおざなりにされ、情緒的な議論ばかりが声高に交わされる。無計画、先送り、決断力の欠如、責任転嫁…。もはや震災の報道一切から目をそむけたい気持ちもある。

しかし、私たちが今すべきことは、つらい現実から目を背けることでも、独り賢人ぶって高みからせせら笑うことでもない。次世代にこの災害を持ち越さないため、また、次に来る災害の被害を少しでも減らすためにも、真剣に考え、悩み、怒りの声を上げることが大切なのだと思う。悲劇に飽きたり、厭世(えんせい)的な気分浸っている場合ではないのだ。

福島第1原発にしろ、被災地の復興計画にしろ、状況を一気に打開する特効薬はなかなか出てこない。みんながそれぞれの持ち場で真摯(しんし)に仕事をこなしていくしかないのだ。

私は今年度、日本芸術院主催の「子ども 夢・アート・アカデミー」に加わり、被災地をはじめ、全国の小学校35校を回り、子供たちに絵を教えつつ、おのれを鍛錬しようと思っている。

子供たちに学びながら、私自身も筆を自由に遊ばせ、楽しみを持って行えば続々と作品ができ、描く絵全てが傑作...という風になれば素晴らしいのだが。そうした一人一人の地道な行為が積み重なって、少しでもわが国の底上げにつながることを、ひそかに祈っている。

さて、私はこのように絵を描いていきたいので、今回をもって「アートな匙(さじ)加減」の硯(すずり)蓋を閉じたいと思う。長い間、ご愛読ありがとうございました。(きぬたに こうじ)